

文献資料
紹介
〈第12回〉

泊如竹関係資料

山本秀雄

はじめに

屋久町が町制施行三十周年記念事業の一つとして、屋久町安房字前岳に「屋久杉自然館」の建設を企画し、平成元年十月開館を目差して工事を進めているが、これが計画書に云う「銘木屋久杉をとりまく歴史的資料と屋久島の自然植生・水資源開発」、即ち「屋久島の文化遺産の保存伝承や、屋久島観光の浮揚活性化・地場産業の振興」に果たす役割は大きなものがある。

その計画の中に屋久聖人と云われて、島民に崇敬される地元安房出身の儒学者泊如竹コーナーが設けられることは、古来如竹が屋久杉利用を島津藩に進言したといわれる人物だけに、その事跡が現れることは大変に意義深いものと云えよう。

そこで身近の如竹関係資料を調べて見ることにした。如竹は元龜元年（明歴元年（一五七〇）一六五五）に活躍された儒者で、薩摩の国学（朱子学）の学統をついで名声は高かった。しかし実学を重んじたので詩文の類は少ないといわれる。没年が八十六歳で長寿を保たれ、その足跡も江戸から沖繩に亘って広がったのに著書筆蹟等は明らかにされていない。殊に屋久島内に僅かに二、三点という淋しさである。それでは諸書から主な資料を左に目録にして見た。

- | | | |
|-------------------|----------|--------|
| 薩摩古板書考 | 有馬純彦著 | 大正十四年 |
| 寛藩名勝考 | 白尾国柱著 | 寛政七年 |
| 稱名墓志・釋氏部（写本） | 本田親孚撰 | 文化十一年 |
| 西藩野史 | 得能通昭著 | 明治十九年 |
| 三国名勝図会・屋久島之部 | 五代秀堯他編 | 明治三十八年 |
| 如竹翁伝（諸家人物誌） | 室直清文集 | |
| 如竹翁伝 | 平田宗高橋著 | |
| 漢学紀源・卷四（薩藩叢書） | 伊地知季安編 | 明治三十九年 |
| 日本宋学史 | 西村天因著 | 明治四十二年 |
| 泊如竹翁事蹟 | 黒葛原兼成著 | 大正十三年 |
| 如竹翁事蹟調 | 黒葛原兼成 | |
| 島津国史・卷五 | 山本正誼著 | 明治三十八年 |
| 薩藩刊書考 | 武藤長平 | 大正十一年 |
| 鹿児島県史蹟名勝天然記念物調査報告 | 第二輯史蹟之部 | 昭和四年 |
| 鹿児島県文化財調査報告書11 | 鹿児島県教育会 | 昭和三十九年 |
| 種子屋久先賢伝 | 森友諒、遠藤家彦 | 昭和二年 |
| 種子屋久碑文集 | 熊毛郡教育会 | 大正未年 |
| 郷土史 | 下屋久村教育会 | 大正三年 |

下屋久村郷土史 大正十三年

南浦文之和尚 大正七年

熊毛郡治纂考 大正七年

熊毛郡紀要 昭和二年

熊毛読本 昭和九年

泊如竹翁伝 昭和十三年

屋久町誌 昭和十三年

如竹散人手簡 寛永十年頃

熊毛郡沿革誌 昭和七年

熊毛支庁 昭和七年

新古見聞記(上巻) 寛政年

薩摩蔭絵巻(泊如竹の生涯) 昭和五十七年

種子島家蔵本 寛政年

家坂洋子 昭和五十七年

その他、地元郷土誌(人物の項)に如竹畧伝を見ることが出来るが、大方は「鳩巢文集」の焼直しと孫引きの様である。

右の伝記で気づいた事は、出典が二つあって、一つは京都の「室鳩巢文集」を引き、他は薩摩の伊地知季安の「漢学起源」による

と見られるもので、例えば如竹が本能寺を辞して文之和尚の門に入る経緯と、藤堂侯の顧問となる切掛にも違いが見られる。

いづれが正しいかはこれからの資料が教えてくれようが、鳩巢の如竹伝は鳩巢の父と如竹が親友であったために生れ、伊地知季安の「漢学起源」によれば、如竹直系の弟子、愛甲喜春の聞書によつて薩摩側の伝記が書かれたようである。

尚如竹の刊行本を挙げれば(薩摩古板書考による)

一、家法倭點 桂菴點 一冊

寛永元年(一六二四)藤堂侯に仕えて江戸にいた時、桂菴

が朱子学の由来と四書の読法を門人に授けるために筆記した

もの

一、南浦文集 文之和尚の文集・詩集・戯言三冊

寛永二年(一六二五)、同六年に再版がある。

編・発行共に如竹が江戸に於て

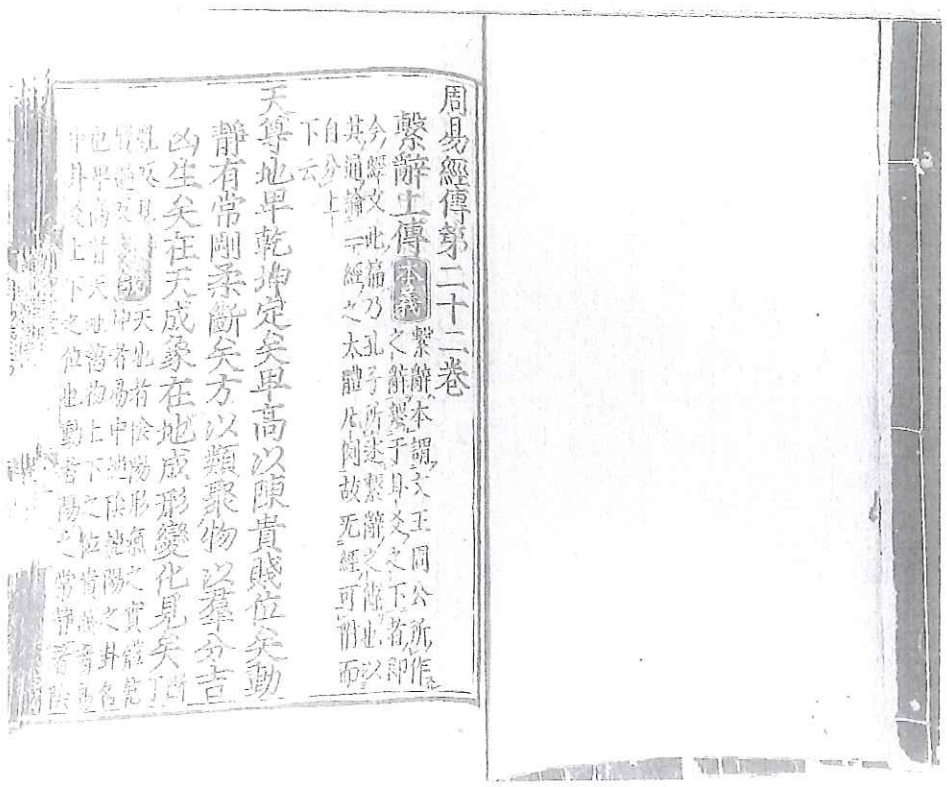
一、四書集註 文之點 十冊

寛永二年如竹が江戸に於て

一、周易伝義 文之點 八冊(写真参照)

寛永四年如竹が江戸に於て

この四点の他にも如竹刊行本はあると物の本に見えているが、今は不明である。尚「四書集註」と「周易伝義」は日本で最初の刊行本であるといひ、広く内外に読まれた功績も又大きいものがある。



泊如竹翁略伝 (山本秀雄編)

1 誕生

掖玖聖人と云はれた如竹翁は元龜元年(一五七〇)に安房に生れ、明暦元年(一六五五)に安房の本仏寺で亡くなった。

姓は泊氏で父は漁業を営んでいた。家は貧しかったので格別勉強でもさせる境遇ではなかったが、生れつき賢かった。

2 修業時代

(イ) 本仏寺時代

種子島・屋久島は文明元年(一四六九)に、時の島主種子島時氏の時代に島民全部律宗から法華宗に帰依させられた。

その後法華宗が盛んになるにつれて島内各村に寺院が建てられて、安房にも京都本能寺の末寺として久遠山本仏寺が建てられた。翁は小さい時にそのお寺の小僧となって名を日章と改め、又養善院ともいった。勉強が進んで十才の頃には既に立派な坊さんになっていたという。

(ロ) 本能寺時代

翁は一生島にくすぶつてはいけな、最と修養して見たいと京都に出て法華宗総本山である本能寺で学び、名高い坊さんになったが、まだ本能寺にある時、藤原惺窩という儒学者が京都で四書新註という本に訓点(送り仮名や、返り点)を下して講義をして、聴衆が多く盛況であった。翁も同僚の坊さんに誘はれて講義を聴きに行ったところが、今までの仏教の学問と違って大変に益する点が多かった。それから度々聞く内にもどうも快く思われない事がある。それより以前に惺窩は明国(中国)に留学する為に船に乗ったが、台風に逢つ

て薩摩の山川港に避難したことがあった。その時、山川の正龍寺に薩摩の文之和尚が訓点した四書新註(はじめこの四書は桂菴和尚が訓点したものを、更に文之和尚が修正したもので当時の人はこれを文之点と云っていた)があり、惺窩はこれを住職の間得和尚より借て写し京都に帰った。

その訓点は自分が始めて世に出したものとして教える、翁はそこが釈然としなかつたのである。もとより翁はその事実を知っていた為に、吾藩の文之和尚の四書新註の訓点、又その淵源を究めようと思つて本能寺を辞して国に帰り、大龍寺の文之和尚の門下で儒学を学ぶことになった。

(イ) 文之和尚師事時代

翁は文之和尚の教えを受けること八年の長きに至り、学問は朱子の学で、ついに学統を継ぐ学者になった。が、入門間もない頃或る生徒の所持品が盗まれるという事件があり、如竹が怪しいと師の前に呼び出されて、お前が盗ったのではないかと尋ねられた。翁は悪びれず、私が盗りましたと答えた。文之和尚は新しい生徒の不心得をいさめ、経学を学ぶ者は斯様な所為は深く慎まねばならないと懇々とさとされた。翁は神妙にこれを聴いていた。

処が二・三日して本当の盗人が分かりました。和尚は非常に驚かれて、すぐさま如竹を呼んで申すには、お前はなぜ盗人の汚名を引き受けたのか……と、翁は答えて、ハイそうです。先生をはじめ皆さんが私の所為であると云っているのに私には盗らないと云う何の証拠もありませんでした。弁解しても駄目だと思つたからです。そして今日は眞犯人が現はれて誠に幸でした。

この事があつてから文之和尚は如竹に人一倍目を掛けて教えた。翁も和尚の心に感激されて学問に励まれたので、後では和尚と並び称せられる有名な学者になったし、和尚は翁を敬待して常に如竹翁



と申されたということである。

和尚と翁を比較するとき、博学宏才では和尚が優れており、徳器・名節と実践躬行に於ては和尚を凌ぐと云われる人になった。

3 顧問・侍読の時代

(イ) 藤堂高虎侯侍読

慶長年中に翁が浪華地方に遊ばされて、攝津の有馬温泉に湯治されたことがあった。その時伊勢の藤堂高虎侯の家老である藤堂某と相識るようになり、家老は翁が碩学で徳行の勝れた人格者・希代の偉才であると感心した。伊勢に帰って高虎侯に翁を迎へて師とするように奨めた。高虎侯は大変によるこんで家老を使者として、礼を厚うして翁を招聘された。翁は高虎侯に始めて面会して云うには、
「拙僧は田舎者で平素忌諱を知らない、今度顧問の職を与えられるについて直言を盡さんと思う、君侯は之を許されますか、若しお許がないならば只今からお暇を戴きたい」と申された。

高虎侯が答へて云うには、「自分が翁を先生としてお迎え申したのは藩内に人は多いけれど、自分が師として仰ぐ様な人が居ません。自分が翁を先生として迎へた次第は諫言を望むからで宜敷く指導を願いたい」と答へられました。

それから翁は高虎侯の左右にあつて先生として職分を十分に盡されました。翁は何処までも竹を割つたような真直な人であつたので、自分の考えを申し述べるに少しも遠慮はいたしません。或る時翁は高虎侯に経書の講義をして居られたが、たまたま道という処に進んだ時に翁は

「人が禽獸と異つて人と云われるのは唯よく人の道を行うからである、若し道を行わなかつたら人は禽獸と変らない、之を禽獸に譬えるならば君侯は差当り虎か狼でしょう。人皆慄え上がつて恐れます。家来は先ず狐か犬と同じでしょう。人は皆馬鹿にして侮ります。

恐れるのと馬鹿にして侮るのとの違いはありますが何れも獣であることには違いありません。」と申されると、流石に高虎侯も之には閉口せられたが、笑って「成程そんなものだろうか、先生の言い方は少しは過ぎはしませんか」と申されました。その席に居合せた家臣達もはらはらしていたと云うことです。

かかる風に直言せられたが高虎侯は翁を尊敬して側を離しません。高虎侯が江戸へ上る時も同道されたし、又翁が江戸に在る時、薩摩関係書四点(十二冊)を刊行されたことは、高虎侯の翁に対する信任の厚さを示してもいようか。当時武將の中で高虎侯は学問を好まれたといい、伊勢が経済的繁栄振りを示したのも翁の実学に出たものと一誌には書いている。寛永七年高虎侯の死去によって翁は藤堂家を辞している。

(四) 琉球尚豊王師時代

翁は藤堂家を去って一旦帰国されたが、かねて儒学研究のために明国に遊学するの志をもっていた。たまたま明国の学者が琉球に来ている事を聞き、寛永九年に琉球に渡った。正に明の梁澤民という学者が琉球に来て居り、同じ儒学の道を修める者で翁と澤民は直に相交り、相互に研究も深まってゆき、翁の徳行も益々光を放つという次第で、秀才の誉れ高い澤民は甚だ翁を尊敬することとなる。如竹翁の居宅を顧天庵と名づけたという。琉球王尚豊侯も翁の声名を聞いて召されて師事されるようになった。一書にいう当時琉球は島津に征服されて士族の間に自暴自棄の風があり、尚豊侯は秩序の乱れを防止するに努めていた時で、苦惱脱出の道を文教に求めて顧問の派遣を薩摩侯に要請されたのか、又は薩摩に対する悪感情をやわらげる為に島津侯が如竹翁を琉球に派遣したのか……。如竹翁が六十五才にして明国に渡るといふ年令的な疑問があるから或は、薩摩が琉球支配の一助に翁を派遣したといふが眞実で、時代的要請で

はなかつたろうか。その点「新古見聞記」の記載は興味がある。

翁の琉球行きのいきさつはさて置き、翁は琉球に僅か三年ばかり居られた。が、その学徳により教化は大いに現われた。それまで経書を読むにみな漢音であったものが和読に向い、その後中山尚王の慶賀使の上京に際しては、文之点の四書を購入し、又新版を起して買い帰る盛況であった。

ここで如竹翁の実学を知るの一端が、琉球から屋久島の親戚のもとに出した書簡にあるので紹介する。

態々一筆可申候 各の身持夜自氣遣に存じ候に付申入候

一、御公儀方御奉公何事に不寄專一候

一、親に孝行の儀は衣裳を進上申し、うまきものを求め進上申を孝行と思ふなよ。親の腹を立てざる様に仕候事專一候

一、人悪かれかし、我一人よかれと思ふ心あれば其の罰にて我身も悪しくなるものに見候。

一、人よかれかしと思ふ心あれば、其御徳にて我身もよくなるものにて候間その心得專一候。

一、大酒をのみ、ひるねを不仕事專一候。

一、春年のはかり事は春にあり、春に物の種子を蒔きつけ不申候得ば年中の被下ものなく候条、種子を蒔付候事專一候。

一、春日のはかり事といふは宵から案じ候て何の職を仕候と思ひ候て辰の時より出立仕候事專一候。

右の候々能々心掛候事專一候。

六月十三日 本琉球より如竹花押

屋久島安房

泊与右衛門殿

泊太左衛門殿

泊 甚兵衛殿

泊 弥兵衛殿

泊善左衛門殿

泊八左衛門殿

日高茂兵衛殿

此の忠孝・忠恕（正直）・勤勉の道を諭された教訓は、今の人達も厚く守る大事な事である。

(イ) 島津光久侯顧問時代

寛永十七年翁が七十一才の時、島津家に召されて藩主光久侯並に藩士を教授せられた。翁を招聘されるに当って次の様なことがあった。

光久侯が江戸にある時、水戸光圀公に逢って世間話をされたことがあった。光久侯は光圀公に「自分はこれから儒学を修めたいと思うが今時誰が一番勝れた先生であろうか」と尋ねられた。光圀公は「それは貴藩の如竹に及ぶものは居りません」と申されたのと、藩の家老伊勢貞昌が藩主に如竹を用いて学を講ぜしめようではないかと勧められた。

それに加えて藩の家臣たちも、翁の学徳高い声名を聞き知っており迎へて師とせんことを希っていたので、翁を召し出して師とせられた。光久侯は城内に一寺を建てて本佛寺と名づけ、そこに翁を居らしめ、翁を篤く遇され禄三百石を下された。翁は常に光久侯の側にあつて君道政事の事に就いて盡言、又直言に何も憚る所がなかった。経書を講義するにも反覆精詳で長かったが、途中で座を起たせる事をしなかつた。光久侯も寛容の徳を以て翁を甚だ信任して其の言を容れられた。顧問の任にあつた時の逸話もあるが割愛する。正保元年翁は病を得ていとまを願ひ安房に静養された。ところが翌正保二年快方の便に候はわざわざ船をやつて翁を迎え教を受けられることは前の通りであつた。

翁は光久侯に側にあること六年、老衰の故を以て屋久島に帰ることになつた。光久侯は翁の功勞を思い召されて、家老島津久通をして養老の俸禄二百石を終生賜わるべき恩命を伝へられた。

翁は之に対して御高恩を感謝して辞退された。そして申されるには「日頃過分の御扶持を戴いていたので老体を保養してゆくには不足はない。ことに出家の身分であるから衣服さえあれば他に望みはない。それより今国中を見るに古来忠勤を励んだ士人の子孫が甚だ貧窮に陥っている家が少くないようである。何とぞその方々へ下されるようにいたされたい」と申しますと、久通は笑つて「聖人臭いことを申されますなあ……」と言いますと、翁は襟を正して「某は小さい時から聖人の書物を読んで修養したのは聖人にならんが為であつた。譬へ聖人となることが出来ずとも聖人臭くなりましたなれば、読書した甲斐があつた訳で御褒詞誠に有難き仕合である」と申されたので、家老は返す言葉もなく唯々赦然たるばかりであつた。

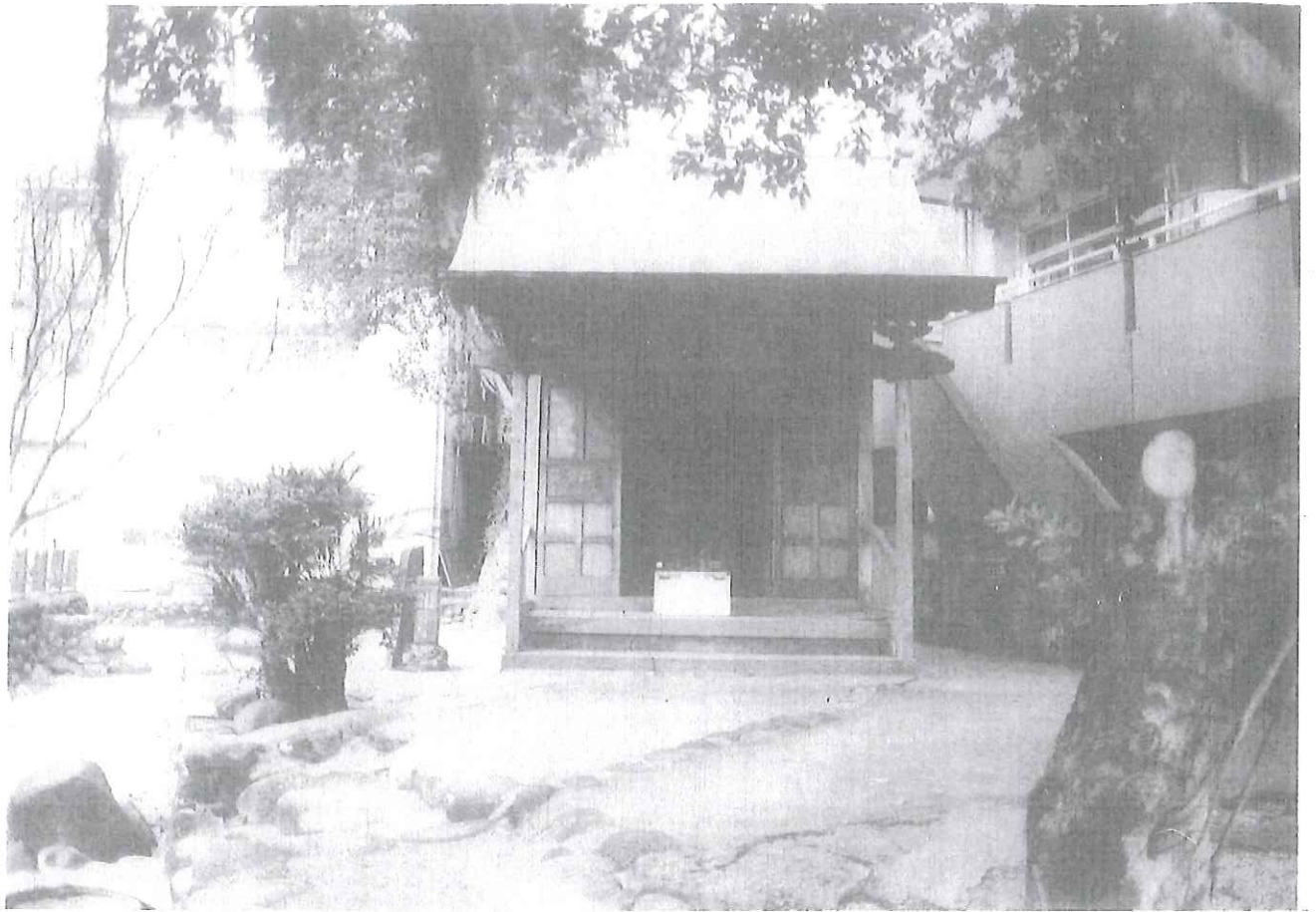
翁の帰島を知つた法華宗の人達は府下に法華宗の本山が無いから、翁を開山として本佛寺をそのまゝ、建て置かれる様にと願ひ出ましたが、翁は城内に大刹のあることは甚だ無益である、その寺禄三百石もあれば巨宝の家臣を養うことが出来ると考へられたので寺を毀して士を養うよう進言された。

大阪に於ける如竹翁

翁は琉球から帰つて一時大阪に住わられた。光久侯に侍講する前のことである（が、伝聞の違いか後の様に記した伝記もある）。翁は大阪に学塾を開いて朱子学を教授し高い評判を得ており、室鳩巢の父と交つたのは此の時のことである。伝記は全て浪華儒林伝中の第一人者あるとしている。鳩巢の如竹伝には「翁は已に八十に近し猶よく精爽強力にして邪寒大暑を以て廢せず、居ること数才ならず邑に帰る」と。

屋久島に於ける如竹翁

安房に帰つた翁は村人の中に交つて常に親子の優さを以て接し、事毎に教え導くという風であつた。当時の村の生活は決して豊かと



は云えなかつた。貧しき人にはかつての貯えを施すということもあるが、常に島内の殖産振興・全体の生活を考えて指導をされた。安房村は川口にあつても地形から井戸は適さないので飲料水は遠くから運ぶ始末で困つていた。そこで私財を投じて用水溝を堀り、住民の便をはかる。その工事は今から約三百五十年も前のことで、通水は何と明星岳（通称ボーズ岳）から引くという大工事であつた。今本佛寺の門前にその面影を偲ぶ溝の跡がある。

屋久杉と如竹翁

今日屋久島は有名な屋久杉の産地であるが、当時は山は御嶽靈山、杉は神木と称して、島の人達は崇りがあるといつて恐れ、誰一人伐採する者はなかつた。翁は島民の困窮を救うのが王道を行うものであると考へ島津に建言し、又山に登つて一七日（七日間）山にこもつて神に祈られた。下山して村の人達に「この度山の神からお告があつた。屋久杉を伐りたいならば伐らうと考へる木に前日斧を立てかけよ。翌日行つて見てその斧が倒れていなくなつたら、それは神木でないから伐つてもよいのだ、と……神様がその様に仰るから試して見るがよい」と、これを聞いた村の人たちは始めて安緒して屋久杉を伐るようになった。神代杉が屋久杉といつて広く世に知られ島の名産になるきっかけである。

その他翁の晩年島での暮の中に村人を導いた多くの伝説が残されている。例えば申酉の日の家造りが災火をまねくこと、又安房川河口での難破防止のこと、河童問答などいろいろあるが今は紙数もつきるので翁の墓地を紹介しよう。遺言に安房川の河口河畔に遺体を葬るようにとの事で、今の県道安房川大橋下東よりに墓石があり、その前に祠を建て島では如竹廟（又如竹様）と呼んでゐる。河畔にあつて死後も村を守つておられると云う。

光久侯からの供養の塔は本佛寺に建てられている。